

一兵卒として

池田義朗

太平洋戦争中の昭和十九年三月十五日、私は福岡県久留米市に在った第十二師団隷下の歩兵第四十八連隊に入隊した。

入隊当日はよく晴れた比較的暖かい日で、付き添って来た人も多く、営門の前はごった返していた。付添い人の中に私より二歳か三歳上の小綺麗な女性が入隊する弟に「身体に気をつけるんだよ。怪我などしないようにね」というような意味のことを言い乍ら涙を流し、別れを惜しんでいた。その様子を今も記憶している。

入隊当日、我々第二次初年兵は全員身体検査を受けさせられた。検査は胸部疾患と性病に罹っているかどうかを調べることに重点が置かれていた。検査の結果、不合格となったものは数人であったが、即日帰郷を命じられた。私は異常なしと判定され、即日帰郷を免れた。

入隊当日、初年兵全員（推定であるが、約二百名）に軍帽（略帽）、軍服、衣袴、脚絆、三八式歩兵銃、帯剣、階級章等が支給された。

上等兵と兵長の喧嘩

入隊した晩のことであるが我々が食事を済ませて隊内で寛いでいると、古参の上等兵と兵長が喧嘩をはじめた。どうも様子からして古参の上等兵が兵長に売った喧嘩のようであった。古参の上等兵が兵長に対してナイフを振りかざし、「貴様殺してやるぞ！」と叫んでいた。そして「どうせ俺は小倉の刑務所に連れて行かれるんだ！ 覚悟は出来ているぞ！」と繰り返し怒鳴っていた。その上等兵は酒保で酒を飲んで来たらしく、相当酔っていた。兵長は適当にあしらっていた。

すかさず予備士官学校出身の若い少尉が中に割って入って双方の言い分を聞き、上手にこの喧嘩を鎮めた。

古参の上等兵も兵長も満州から帰って来て、間もなく除隊をすることになっており、上等兵は在満当時の不平不満を爆発させたのであろうと推測した。

幹部候補生に対する古年次兵の私的制裁

配属将校のいる中等学校で教練を学んだ者には幹部候補生になる為の試験を受ける資格が与えられていた。私達よりも先に入隊した第一次初年兵の中でこの試験に合格した者は毎日一ヶ所に集められて教育を受けていた。どういう教育を受けたのかは判らなかったが。

私達の中隊にも幹部候補生が六、七名いて、教育を受けて中隊に戻ってくると、一列横隊に並び直立不動の姿勢をとり、古年次兵に対つて「只今戻りました」と挨拶をする。すると古年次兵達は、二言、三言説教めいたことを言つて平手で顔を殴る等の私的制裁を加えた。それが毎日続いた。

入隊前に私は「軍隊での私的制裁は日常茶飯事だ」と経験者から聞いて知つてはいたが、幹部候補生が我々の入隊当日、私的制裁を受けるとは予想してもいなかった。

古年次兵が初年兵に私的制裁を加える理由については古年次兵は根性の据わつた強い兵隊を作る為だと言つていたが、私は古年次兵がある種の感情を持つていた為だと思つていた。即ち小学校又は高等小学校を出て中等学校に進まず、社会に出た古年次兵には幹部候補生となる為の受験資格は与えられていない。古年次兵が下士官になるには如何に努力しても亦如何に成績優秀であつても数年はかかる。従つて下士官もしくは将校に極めて短期間でなれる幹部候補生制度には強い不満を持つていた。

私自身はこの制度には大きな欠陥があると思つていた。例えば高等小学校を卒業して三年制の農学校に進み、たつた三年間の教練の指導を配属将校から受けただけで甲種幹部候補生となり、やがて将校となり除隊してからは在郷軍人会の幹部となつた人を幾人も見て来た。

之に比べて私のように五年間旧制中学で、教練の授業を受けていながら旧制中学の四年と五年の二ヶ年間学んだ転校先の学校には配属将校がいなかった、その為には幹部候補生となる為の試験を受けさせて貰えなかつた。

根性の据つた兵隊に仕立て上げるといふ理窟をつけて幹部候補生を殴るといふ暴力行爲には賛成出来ないが、この制度に矛盾したところがあつた為に悔しい思いをしたことを私は今も忘れることが出来ない。

家族との面会を許される

四月下旬、我々は満州へ連れて行かれる前に家族との面会を許された。

上官は初年兵全員に、家族に宛てて面会場所と日時を書いた葉書を出すように、と命令

を下した。

面会場所は久留米市内の国分射撃場で、面会の日は忘れたが、面会許可の葉書は二枚という少ない枚数であった。

私は佐賀県の池田家の本家の当主、池田善蔵叔父と長野県にいる弟義孝宛に葉書を出した。善蔵叔父の弟に夏雄という人がいたが満州で軍務に服していた。

善蔵叔父は幼い次女のハツヨが藁切機で手に怪我をして病院通いをしているということ
で面会に来ることが出来なかった。弟義孝は快く信州から来てくれた。

面会日当日は晴れていて暖かく面会するには最適な日和であった。面会場所で首を長くして待っていると、国防服に学生用のオーバーを羽織った姿で遠くから弟が歩いて来るのがわかった。途中で足をとめて何か尋ねている様子なのでこちらから走って行って会おうかと思ったが私の居場所が判つたらしく急ぎ足で私のところへ来た。

弟義孝は祖母の作ってくれた大豆にメリケン粉をまぶした煎豆を私に差し出した。砂糖もサツカリンも入っていない甘くない煎豆ではあったが美味しかった。

飽食の時代と言われる現在、若い人達には到底想像出来ないだろうが太平洋戦争中は砂糖もサツカリンも入っていない、甘くない煎豆でも御馳走の部類に入っていた。

面会時間は約一時間であったので、はしょって話を進めていった。私は周囲に人影がないのを確かめてから弟に言った。「こんな辛い軍隊などには入らなくて済むようにしろよ。入隊を免除してもらえる方法を考えろよ」と。

更に続けて「お前は幸か不幸か東京電灯（株）の洗足池変電所に勤めていた時に肺浸潤を患い、田舎で静養したことがあるが、徴兵検査の時に検査官にそのことを言えば、検査官も判ってくれて入隊を免除してくれると思う。決して自分から入隊したいなど言っている駄目だぞ」と徴兵検査を翌年に控えている弟にくどくどと言った。憲兵隊に知れば即刻逮捕され「この非国民め！」と行って体罰を受けるところだが、私は何としても辛い軍隊には弟には入ってもらいたくないと思って戦時中ということも顧ずに言った。

ところが弟はなかなか納得しない。病気をしたことを隠してでも軍隊に入りたいような様子であった。無理も無いことである。世の中は軍国主義一色で、御上は青少年に軍人になつて米英蘭と戦っている太平洋戦争に参加してもらいたいとしきりに煽っている。そして血気にはやる青少年の殆どがその気にさせられた時代であったから仕方の無いことである。

私は生きて還れるかどうかも判らないと思うと又泣けて来た。入隊の時に着用して来た

国防服や下着や靴を弟に渡し、家に持ち帰るようにと頼んだ。

暫くして「面会止め！」の号令が聞こえて来た。私は弟と固く握手をして別れた。そして「駆け足っ！」の号令に従って急いで連隊に還って行った。

銃剣術の稽古

その後我々第二次初年兵は毎日銃に帯剣を装着したような形をした木製の用具を使って敵を突く銃剣術の稽古をさせられた。

歩兵の銃剣突撃は白兵戦の基本であるのでこの稽古は重要であった。稽古の要点は果敢な気力と刺突^{しとつ}であった。細部に亘^{わた}る稽古の内容は省略するが、馴れると胴衣と面をつけて実戦さながらの稽古をする。之は満州へ行ってから行われ、久留米では稽古の中に取り入れられなかった。兎に角毎日この稽古の繰り返しで、皆飽々して上官のいない所で不平不満を言い合っていた。久留米にいる間は行軍とか射撃の訓練はなかった。

教官は召集されて来た予備役の下士官が殆どであった。

私は奥の歯が虫歯になっていてそれが気になり精神を集中することが出来ない。口をゆがめているので教官から度々叱られた。然しこの癖はなかなか改めることが出来ず、気が散って行動のすべてに影響した。

内務班での過ごし方

自分の軍靴だけでなく、古年次兵の軍靴も磨かされ、銃や帯剣の手入れ、朝、昼、晩、交替交替で飯あげ（飯を炊事班で容器に入れて貰って初年兵が二人で担いで中隊まで持つて来る）、給仕（上官に飯と汁を器に盛って差出す）、自分も食べる。食後の喫煙（初年兵は雑用が多くて丸々一本吸うことが出来なかった）、食器洗滌、炊事班への食器の返納、歩兵操典や戦陣訓の独習、古年次兵と自分の衣袴の洗濯、物干場での見張り（軍隊の中では洗濯物の盗難が多発していた）等々であった。

満州に向けて出発

宮庭の桜の花が満開になり、春の到来を実感出来るようになった四月中旬、我々初年兵は満州から迎えに来ていた下士官に引率されて満州国牡丹江省東寧県城子溝に駐屯している本隊に組み込まれる為に久留米を出発し、博多港へと向った。

出発日は記憶していないが、出発時刻は夕方六時ごろだったと記憶している。

隊伍を組み、威風堂々行進を始めた。連隊の門をくぐり街中に出ると沿道には我々の出發の日時を噂で知った父母や兄弟、姉妹、親類縁者や友人達が提灯をかざして遅しい軍人となったわが子、わが兄や弟、友人を一目見ようと大声で叫び、大変な賑わいであった。中には泣きながら息子の名前を叫んでいる母親もいた。大勢の人の叫び声がいっまでも鳴りやまず、沿道に響きわたっていた。未だ夜の明けないうちに博多港の待合室附近に到着した。全員地べたに胡坐をかき、銃をかかえて朝日の昇る時刻まで居眠りをして過した。程なく夜が明けた。快晴で気持のよい朝であったが中には朝まで一時も居眠りが出来ず、つらそうな顔をしている兵隊もいた。

私は久し振りに海を見て心躍り、朝まで眠れたせいか頭の中はすっきりしていた。紺碧の空、博多湾の眺めの美しさは今でも忘れることが出来ない。朝食を摂ったことや乗船するまで何時間位待ったかなどはすっかり忘れてしまっただけで思い出せないけれど。

博多港で輸送船に乗り釜山港に向う

暫くして兵隊達を運ぶ輸送船が博多港に入港した。乗船後船内では兵隊達に慰問袋が配られた。私にも寄贈者達から兵隊宛の手紙の入った慰問袋が配られて来た。文面には寄贈者数名の住所と名前が記されていて、心のこもった慰問袋であったと記憶に残っている。手紙には次のような意味のことが書かれていた。「兵隊さん、御出征御苦労様です。祖国日本と銃後の私達をどうか御護り下さい。武運長久を御祈りしています」と。

釜山港に到着

その日のうちに釜山港に到着をした。航行中輸送船が大揺れに揺れて船酔をする者が続出し、食べたものを吐いてしまう兵隊もいた。私は幸い吐くということはなかったが、柱に掴まっていないと転げてしまうような状態であった。

船長や操縦者や従業員は船の揺れるのを気にかける様子もなく、笑顔で、楽しそうに仕事をしていた。

釜山港に到着し上陸が終わると上官は点呼をとるから集合せよと言って来た。乗船時に点呼をとったのだからその必要はないだろうと私は思ったが、乗船時、下船時上官は必ず点呼をとった。その訳は海上輸送中に兵隊が行方不明になったことがあったからだと言われ、次兵から聞かされた。

釜山駅で牡丹江行きの列車を待つ

釜山駅で列車を待つことになった。満鉄が差し向けてくれる列車を。乗車するのは翌朝で、兵隊達は駅の待合室でコンクリートの上に胡坐をかいて一夜をすごした。軍人の我々に対する扱いに皆不満を持っていた。

然し四月中旬のことなのでそんなに辛いことではなかった。宿に泊まらなくても一晩位のことであつたので。

翌朝、列車が釜山駅に入つて来た。列車の東側の窓の日除けは機密漏洩を防ぐ目的で降ろされ、列車内は薄暗かつた。無論東側の景色などは見ることは出来ない。列車は北へ北へと走つたが我々は満鮮国境を通過したことも気付かなかつた。各駅停車ではなかつたので、今どの辺を走っているのか、どこの駅を通過したのかも皆目わからなかつた。

城子溝駅に到着、駐屯地に向う

翌朝、列車は城子溝駅に到着した。雪が積もっていて、列車が到着した朝もしきりに降つていた。「寒いなあ！」と隣りの戦友が呟いた。四月だというのに内地で味わつたことのない寒さである。「えらいところに連れてこられちゃつたなあ！」と私が言うのと戦友の柳田も渋い顔をして笑つていた。

下士官に引率されて二列縦隊で行進し駐屯地の兵舎に向つたが、道が狭く、泥濘ぬぬつていて歩くのに大変難儀をした。午前中に兵舎に到着したが、我々の所属する八中隊の中隊長の金原漢生中尉かなはみかん以下幹部や古年次兵が兵舎の前に整列して迎えてくれた。

兵舎の中で旅装を解き、休憩したが、兵舎の中はペエチカで暖められていて兵隊達はいっぺんに旅の疲れが出て居眠りをする兵隊も数多くいた。私もその仲間で暫く居眠りをするとなつた。

暫くしてから所属する班の班長の岡田軍曹が長々と挨拶と班内での心得等を我々に話し出した。その話の中で「この度私の弟も所属する部隊は違うが内地より満州にやつて来た。君等と同じ歳だ」と感慨深そうに話をしたことが印象的であつた。

数日して訓練が始まつた。満州に来てからも訓練は銃剣術が主であつた。内務班でやることは久留米でやつたことと何等変りはなかつたがペエチカを焚く仕事かふえた。

銃剣術の試合と褒美にまつて

銃剣術の試合が中隊単位、大隊単位、連隊単位で時々行われた。連隊単位の試合には上

官の奥さん達が招かれて見物に来たこともあった。

兵隊は全員防具を付け紅白に分れ、極めて熱のこもった試合が展開された。

私は中隊単位の試合で幸運にも入賞出来て、褒美として蒸しパンを戴いた。戦友に頒けてやるということもせず、ベッドの下に隠して置いて、夜間消灯後に毛布を被って戦友たちにはわからないようにこっそり食べた。そのときの美味しかったことが今も忘れられない。初年兵時代の思い出の一齣である。

急性気管支炎に罹る

入隊前にあまり筋肉労働をしたことのなかった私には軍隊生活は身体にこたえた。

労働と寒さであり丈夫でない私は風邪をひき、中隊の一室に寝かされ、練兵休（訓練を休むこと）をとって静養をしていた。

中村衛生上等兵は親切に見看ってくれた。風邪をひいて練兵休をとって寝ているのは中隊の中では私一人だけで、中村衛生上等兵が小声で「池田二等兵は弱いなあ！」と呟いたのを聞いて悲しかった。そのうちに熱が三十九度近くまで上がったので、中隊長は「診療所で軍医に診て貰った方がいい」と言い、班付きの軍曹が私を診療所に連れていってくれた。

診療所のベッドに寝かされて軍医が診察をしてくれた。軍医は「急性気管支炎を起こしているからこの診療所で治療を続けよう」と軍曹に言った。その晩更に熱が上り、中村衛生上等兵から後で聞いた事であるが、四十一度まで上がったとのことであった。無論私は記憶になく、その晩中隊の初年兵が交替交替で私の額を冷やしに来てくれたことも記憶にない。ただ記憶があるのは、衛星兵長二人が付き添っているところで私が「苦しい！ 苦しい！」と小声でうめくと「今注射をするので楽になるからな」と幼い子供に言うような語り口で私に言い乍ら注射を一本うってくれた。その注射が効いたのか或は戦友たちに額を冷やして貰ってその効果か、ねむってしまった。目が覚めたのは翌日の朝で熱も平熱になっていた。然し朝食に出た粥も食べる気がしなかった。

城子溝の野戦病院に入院

その日の午前中に野戦病院に移された。病院は小高い丘の上に建てられていて、モダンで明るい二階建ての建物であった。

重傷の患者は二階の病室に、軽傷の患者は一階の病室に入れられた。私は一階の病室

で古参の兵長の隣のベッドを使用するようにと衛生兵から指示された。

衛生兵は時々やって来て、気のついた点に注意し、又指示をしたが、軍医の顔はあまり見なかった。私は連隊の中の診療所で治療を受け、ほぼ回復してからの入院であったので、養生をするという目的で入院させられたのだろうと思った。満州の四月、五月は未だ寒く、身体にこたえたが、病院の中は適度に温められていて快適であった。

戦争は長引くと思いい将校への道をさぐる

私は入院前に考えた。戦争は長引くようだし、当分内地へは帰れそうではない。それならば入隊してからでも受験することの出来る陸軍士官学校の入学試験を受けてみよう。

久留米の国分の射撃場で弟と面会したときに「こんなつらい軍隊には入れられないように何か方策を講じよ」と言った私ではあったが、軍隊生活を続けなければならぬ現在では兵卒で過ごすよりも将校となって過せるものならその道を選びたいと痛切に考えるようになった。満州に連れてこられた直後に中隊長に申し出ると中隊長は「午前中訓練を休んで受験勉強をしてもよろしい」と言ってくれた。許可された後に郷里の弟に中学生時代に使った数学の参考書を送ってくれるようにと葉書を出して置いた。その参考書が中隊に届き、中隊付のM少尉が病気見舞券々持って来てくれた。しかもメモ用紙を沢山添えて。私の病気が殆んど治った時期だったので大変喜んでくれて「病気も好くなっているので、その様に中隊長に報告して置こう」と言って病院を出て行った。

或る時ベッドの上で参考書を読んでいると、隣のベッドに寝ていた古参の兵長が、「池田二等兵！ここは病院だぞ！病気を治すところなんだから参考書など読むことをやめて養生に専念しろ！」と。そしてこうも言った。

「読むならば軍人勅諭か歩兵操典を読んで暗記しろ！」と。

私は些か腹がたつたが黙って聞いていた。またベッドに私が寝ころがって歩兵操典を読んでいると、兵長は「ベッドの上で正座して読め！」と大声で怒鳴った。

軍人勅諭や歩兵操典は謹んで読むべきものとされていたので私は兵長の言うことが尤もだと思ひ、その非を悔いた。

将校の病死と遺体の搬送

或る日のこと二階の病室で治療を受けていた将校が死んだ。遺体は毛布に包まれ、幾重にもロープが巻かれていた。そして二人の衛生兵に板張りの廊下を曳かれてこっそりと、

見送る人もなく裏口から運び出された。私はハツとした。そして暫くして粗雑な軍の扱い方に対して憤りを覚えた。

どこへ運ばれて行くのだろうか？ 病気は何だったのだろうか？ と考えながら心の中で掌を合わせた。そして人の世の無常を思い、其の後幾日間か憂鬱な気分で過ごした。

いよいよ退院を許される

やがて六月となり、急に満州にも待ちに待った遅い春が訪れた。春をとび越して初夏の訪れかと思われるような暖かさである。

樹の花も草花も一斉に咲き始め、病院の周囲は花園と化したような美しさであった。

暫くして退院の許可が下り、同じ八中隊の二年先輩のM上等兵と一緒に徒歩でたらだら坂を下って隊に向った。

平常の勤務に戻る

私は入院している間は殆んど身体を使わなかった。その為に隊に帰ってから平常の勤務に就かされた時は大変辛かった。病み上りの体では思うように行動出来なかった。銃の手入れとか、軍靴を磨く等の内務班での仕事はそれ程辛いという事はなかったが、銃剣術の稽古、射撃演習、行軍等は非常に辛かった。その中でも兵舎の前の広場で中隊長以下全員で行う銃剣術の稽古は久留米にいた時と同じように午前も行い、午後も行い、同じ動作の繰り返しで、エーイ！、エーイ！の掛声はあたりに響き又他の中隊の掛声も聞こえて来て阿鼻叫喚を想起させるようないやな気分させられた。之が連日続くのである。

射撃の演習はというと、小銃班、擲弾筒班、軽機関銃班とに分れ、私は小銃班に所属していたので三八式歩兵銃を用いて伏撃ち、膝撃ち、立撃ち等の稽古をした。その中でも地べたに腹這いになって、装弾して数十米先の的に当てる伏撃ちの稽古が多かった。

的の中心部に当てることは稀であったが首尾よく命中したときの喜びは格別であった。偶々私の撃った弾が中心部に当たった。すると傍に立って指揮をしていた金原中隊長はこう言った。

「池田！ 君は射撃がうまいなあ！ 中学で習った教練では射撃で一番だったんだらう？ なかなかうまいではないか！」と。煽てられた私は、有頂天になり、他の兵隊の前で誇らしげに笑った。

行軍演習で弱音を吐く

行軍演習はしょつ中あるものではないが、初夏の或る日、中隊全員の行軍演習が行われた。無論完全軍装をすることであるが。行程数十軒。途中で数回休憩をした。行軍がまさに終わろうとしていたその時、中隊長は前方の小高い丘を指して突撃の命令を下した。「疲労困憊その極に達す」とはこのことだろうが、「私はもう駄目だ」と言いながら他の兵隊の後尾について行った。

このことが後々までも中隊の中での語り草となり、古年次兵から罵ののしられた。

消毒されていない水道水を飲む

演習の中でも夏季の演習は喉が乾いて兵隊達は何ものにもまして飲料水が欲しかった。満州の中でもこの地方は水道水が消毒されておらず、煮沸消毒をされていない水は飲んではいけないと固く禁じられていた。

演習が終って兵舎に帰って来ても矛盾した話だが煮沸消毒をされた湯は用意されていない。止むを得ず我々は洗面所へ駆け込んで、顔を丁寧に洗う振りをして、こつそりと水道の水を手ですくって飲み、演習の渴きを癒した。勿論上官に見つからないように。上官のいない所で初年兵達は鉄管ビールだと言って笑っていた。

第一期の検閲

初夏の雨上りの晴れた或る日に初年兵の訓練の成果を調べる検閲が行われた。雨上がり
の検閲場は土が湿っていて泥濘ぬりっている箇所もあった。

検閲官がどのだれかということは記憶にない。初年兵達は緊張をした面持ちで検閲を受けた。検閲の内容は一部始終憶えていないが、最後に行われたのは中隊長達が先頭に立って突撃をする場面であった。

私のように病み上りの者や訓練中に怪我をした初年兵は一箇所に集められ、小銃を持たずに帯剣だけをつけて検閲の状況を見ていた。勿論直立不動の姿勢をとって。検閲官の数や初年兵の数等は把握していないが、連隊全部の初年兵の検閲であるので相当の数であった。

検閲後初年兵は全員一等兵に昇進した。

指揮命令系統と兵員

田中大佐の率いる我が歩兵第四十八連隊は三個大隊から成り、三個大隊の下に九個中隊があり、一個中隊の兵員は概略一二〇名であった。随って三個大隊併せると概略一〇八〇名乃至一一〇〇名以上という一応計算になる。

ある資料によると第十二師団には我々の歩兵第四十八連隊の他に歩兵第二十四連隊と歩兵第四十六連隊が所属していて、それも久留米に留守部隊がいたとのことである。

在満の第十二師団の兵員は三千名以上と推測されたが、第一方面軍の指揮下にあり、軍司令官は山下大将であった。

山下大将の視察と兵隊達の思惑

山下大将は昭和十七年二月、英軍八千余を率いるパーシバル將軍をシンガポールに於て降伏させ、同年七月、第一方面軍司令官となって満州に来られた。昭和十九年九月、第十四方面軍司令官となってフィリピン戦線に赴くまでの間第一方面軍司令官として満州におられた。

記憶を辿ると昭和十九年の七月下旬か八月上旬ごろのことであったと思われるが、山下大将がわが連隊に来られ、訓練の状況を視察された。当日私は数十米離れた地点で山下大将を見ていた。眼光は炯炯としていて容貌は魁偉で、勇氣凛々三舎を避くという中国の故事が頭をかすめた。

関東軍の南方戦線への転用

それ以降、関東軍の南方戦線への転用の規模が大きくなって行った。

わが歩兵第四十八連隊も日ならずしてフィリピン戦線に赴き、山下大将の指揮下に入るのではなからうかと私は想像していた。

連隊葬で御経を唱える

その後程なく連隊葬が執り行われた。僧侶の倅で御経を読める私に連隊本部から葬儀に御経を読むようにと言って来た。

私は連隊が保有している僧衣そういを軍服の上に纏い、叔父の寺から送って貰った袈裟をその上に重ね、数珠と経本を手にして、棺の前に立った。祭壇には兵隊の名前と出身地を書いた板が立てられていた。読経を始める前にこの板の字を読んで私は大変驚いた。それもその筈、これから私が御経を唱え慰霊をしようとする英霊は入隊日の前日、久留米駅の裏の

旅館と一緒に泊まった同じ本籍地の青年であったのである。

同じ本籍地で入隊前夜同じ宿に泊まった青年の棺の前で御経を読むとは考えてもみなかった。

彼の靈魂が靈山浄土りょうぜんに赴く前に縁のある私に御経を上げさせたのか、そして又私の読んだ御経を聞いて彼は満足してくれたのだろうかと連隊葬の終わった後も頭から離れなかった。

初年兵の外出禁止と上官の泥酔

軍の上層部は機密が外部に漏れるのを極端に恐れて初年兵の外出まで禁止をした。外出をして息抜きをし、日頃の鬱憤を晴らせると楽しみに待っていた初年兵達は力を落した。古年次兵は従来通り外出を許され、歓楽街で遊んで清々とした顔をして兵舎に戻って来る。すると初年兵は「古兵殿お疲れ様でーす！」と言って近寄って行って脚絆を解いてやった。

今考えれば馬鹿馬鹿しくて、腹が立つが、初年兵にとっては当たり前行為であった。

ある夜のこと、若い少尉と古参の曹長が泥酔して帰隊した。帰るや否や少尉は防火用水をがぶがぶ飲み始めた。酔い醒めの水というところか？そして曹長と暫らく訳のわからないことを話し合っていた。「飲んだ酒が不味い！女将のサービスが悪い！」と愚痴をこぼしていたがそのうちに少尉の呂律が回らなくなり、何を喋っているのか判らなくなった。暫らくして私は眠ってしまった。

入浴の楽しみと古年次兵の温情

或る日、訓練の終わった夕方のことであるが、入浴をしようと共同浴場に行った。浴場では古年次兵に敬礼をする必要もなく、寛げる場所であった。すっかりいい気分になり、入浴をすませた。私は自分の履いて来た軍靴が盗まれていることに気がついた。まさか他人の靴を履いて帰隊する訳にもいかない。仕方なく裸足で中隊に帰って来た。古年次兵に顔に平手打ちをくらうことを覚悟で恐る恐る報告をした。ところが案に相違して物品庫係の兵長は何も言わずにこっそりと古い軍靴を物品庫から持ち出して来て私に密かに渡してくれた。「地獄に仏」の諺を私は実感したのである。

軍隊と言う所は面白い所で自分の物を他人に盗まれるとひどく叱られたが、他から盗んでくると気合があつて宜しいと言つて褒めてくれたものである。

緩粉河に近い国境の警備

私の所属する八中隊は、連隊を離れて緩粉河に近い場所、即ち国境に近い最前線に移動した。

緩粉河を挟んで日本軍とソ連軍は互いに睨み合いを続けていた。私達の任務は、交替交替で監視櫓やぐらに登ってソ連兵の動向を具つぎまに監視をし上官に報告すること、密偵が緩粉河を渡ってソ連領からわが軍の陣地に入って来ないかどうかを監視することであった。そして合間に銃剣術の稽古や射撃の訓練をし、夜は巡察に出て密偵を捕まえることであった。密偵が捕まることは殆んどなかったが。

又我々は毎晩のように狼の遠吠えを聞き、狐に似た麋もに時々襲われてこわかった。

連隊本部勤務を命じられる

或る日のこと、金原中隊長は私を呼んで次の様なことを言った。

「この度連隊本部より初年兵一名を差し出すようにと言って来た。今日糧秣を運んで来たトラックが連隊本部に帰るので、その車に乗せて貰って連隊本部に行くように」と。

私は予告なしに突然言われたので驚き、八中隊から弾き出されるような気分がして悲しかった。

金原中隊長は続けて私に次のようなことを言った。

「この度、連隊本部に差し出す初年兵は中等学校卒業以上の学力があり、多少事務の補助が出来る者と言って来た。池田一等兵は適任であると思うし、それに陸軍士官学校の入学試験を受ける君には訓練も無く多少暇もある連隊本部勤務の方が好いだろうと思って選んだのだ」と。

この言葉を聞いた私は大勢の中から選ばれて連隊本部に移されることになったのだと思いい直し、朗らかな気分になった。

トラックに揺られて凸凹の道をくだり、夕刻連隊本部に到着した。すると各中隊から差し出された初年兵が集っていた。

全員九名で、当日付けで連隊本部付の伝令要員となった。

初年兵の中でも珠算が達者で経理事務の執れるS一等兵は大変重宝がられ、早速糧秣担当のM准尉のもとで働くこととなり、其の後殆んど毎日算盤を弾き、帳面つけをやらされていた。S一等兵は佐賀県立の商業学校を卒業していたが、何かの理由で幹部候補生になれなかったらしい。私は連隊長室の隣の事務所に勤務することに決まった。電話の取次ぎ、電話による各大隊、中隊への連絡、徒歩で上官の命令を伝えるに行くなどが主な仕事であつ

た。特にむずかしい仕事ではなかった。

電話の受け答えについては「民間で使う言葉をやめて軍隊用語を使い」とやかましく上官から注意された。

この軍隊用語なるものが問題である。九州出身の上官達の言葉の中には随分九州弁が混じっていた。早口で言われるとさっぱり判らない。聞き返すと怒られる。例えば「お前達は何をしておるのか」と叱る時「わどんなんしょっこう」と聞こえる。山梨県で生まれ、神奈川県、長野県で少年時代を過ごした私には九州弁がわからず難儀をした。この難儀は復員するまで続いた。

上官は「九州弁こそ軍隊用語である」と豪語していた。

ペエチカ用の石炭を炊事場で盗む

私の寢室の隣の部屋に下士官二名が寢泊りしていた。私は朝早く起きてペエチカに火を付け、部屋を暖めるようにと言われていた。焚付けの木片こっばも少なく、石炭は粉炭が多くて塊炭はごくわずかで焚き付けるのに苦労をした。この事を上官に話すと「差し繰くって焚け」と言うだけで、木片も塊炭も補給をしてくれない。「差し繰れ」とは「やりくりをしろ」ということであるが軍隊では結局のところ不足をした木片や塊炭を盗んでも手に入れて焚けということである。そこで戦友の佐藤一等兵と相談をして、夜中に炊事場へ盗みに行くことにした。いよいよ実行に移したが二回、三回とうまく行き、すっかり味をしめて調子づいて又続けた所、五回目か六回目に到頭炊事班長のN軍曹に見つかってしまった。酷く怒られたが殴られるということはなかった。

N軍曹は次の様なことを私と佐藤一等兵に言った。

「君達が石炭を盗んで行ってペエチカを焚いて上官を温めてやろうとするその健気な気持はよくわかる。然しそうかと言って石炭を盗まれても知らん顔をしている訳にはいかない。それを黙認していたならば兵隊に食べさせる飯が炊けなくなってしまう。今回は許してやるから連隊本部へ帰れ」と。

私は今も班長のかけてくれた情けというものが忘れられない。

兵隊のお坊さん

私の所属する第十二師団にも隷下の歩兵第四十八連隊にも従軍僧はおらず、連隊葬のよくな仏事にも何処からか従軍僧に来て貰うということは出来なかった。兵隊の中で経験の

ある者又はその資格のある者で賄った。

そのような事情から連隊葬だけでなく官舎の家族から御経を唱えて欲しいと中隊長や連隊本部に要請があれば概ね私に命令が降りた。官舎に行き御経を唱えようと、奥様方が私を大切に扱ってくれて、供養だと言ってぼた餅などを御馳走してくれ、御土産に御菓子をくれた。連隊の門をくぐる時、衛兵は「和尚さん御苦労様です」とにこにこしながら見送ってくれたり、迎え入れてくれた。御土産の御菓子は衛兵に「はい御土産」と言って渡した。持物の検査はなく顔パスであった。

芸は身を助けると言われているが私はこれを体得した。

陸軍士官学校の受験を断念する

私は連隊本部付となって八中隊を離れる時金原中隊長から「連隊本部付となれば中隊と違つて訓練が無いので受験勉強をする時間的余裕があると思う」と言われて来たが、暇どころか多忙で勉強が出来ない。又入隊直後急性気管支炎を患って入院したことなどを考え陸軍士官学校の生活には耐えられないと判断し受験を断念することにした。

第十二師団の南方への転用

昭和十九年十二月の中旬、我々歩兵第四十八連隊を含む第十二師団の兵力の転用が決定した。行先は秘密であったが、渡された装備品で南方ということだけは判った。多分フィリピン戦線で采配を振っている山下大将の指揮下に入るんだろうと兵隊達は囁いていた。早速兵隊達は出発準備を始めた。出発まで四日しかない。

暗号班の兵長、暗号表を紛失

ところが暗号表一枚を暗号班の中村兵長が紛失してしまった。探しても見つからない場合は大変なことになる。その暗号は使えなくなってしまうのである。

下士官と我々初年兵数名とが不眠不休で一つのテーブルを囲み、書類を一枚一枚繰って調べた。調査を始めてから丸一日経っても出て来ない。上官は師団司令部付の易者に来て貰つて占つて貰うことにした。易者は召集兵の一等兵であった。占つて貰った結果、紛失した暗号表は連隊本部の中にあるということであった。結局見つからず、中村兵長がのこって入れ替わりに入って来る連隊に調査してもらふこととなった。

兵隊は有蓋貨車に詰め込まれる

さて出発の日は昭和十九年十二月二十二日午前五時であった。我々は住み馴れた懐かしい兵舎を出て城子溝駅に向った。零下約二十度という厳寒の中を兵隊達は肅々と行進を続けた。出発時に兵営附近で信号弾が一発揚った。密偵が連隊の出発を何処かへ報せるための信号弾の打ち揚げだったと思った。

城子溝駅に着くと兵隊達は列車が来る迄の間身体を振動させたり足を絶え間なく動かしたりしていた。

暫らくして有蓋貨車が駅に入って来た。貨車の入口にはつららが垂れ下がっていた。寒々とした貨車に詰め込まれ、毛布を被って厳しい寒さに耐えていた。私は隣の柳田一等兵に言った。

「これでは人間扱いではないよな！ 貨物同様に扱われているよな！」と。

柳田一等兵は「そうだなあ！ 酷い扱いだよ！」と言って苦笑していた。

有蓋貨車の扉が閉まると貨車の中は真暗である。途中兵站部のある「イーメンパー」という駅で降り、暫らく外に出て休憩し、弁当を受け取って貨車に戻った。この駅で休憩の為に外に出て初めて雪が降っている事に気付いた。あたり一面銀世界であった。

旅順に到着、野営を続ける

その日のうちに旅順に到着、約十日間野営を続けた。旅順に滞在した目的は理解出来なかったが、輸送船の順番待ちかと思われる。多少の訓練は続けた。各中隊の兵隊は余り用事がなかったが、我々伝令要員はあちらに走り、こちらに走りして結構忙しかった。

音楽学校出身のM一等兵は詞や曲を作り、彼の指揮で夜寝る前のひと時皆で歌って憂さを晴らした。

旅順を発って釜山へ

約十日間の野営を切り上げて釜山に向って出発した。到着後市内の仮兵舎である某小学校で旅装を解いた。釜山の寒さも厳しかった。連隊本部の事務所のストーブ用の薪も乏しく、悪いこととは知り乍ら扉を壊し、その木片を薪代りに焚いて寒さを凌いだ。

巡回と称して釜山の街を見物

R曹長は巡回と称して我々に銃を担がせて隊伍を組み、釜山の街を見物させてくれた。

途中で或る老婆が佇んで掌を合せ、恭しく我々を拝んでいた。多分戦地に赴く我々兵隊に祖国日本を守って下さいと言って拝んでいたのだろう。

釜山より門司へ向う

数日経ってから一万屯級の輸送船日向丸が釜山港に入って来た。

この時点では行先は南方としか判っていないかった。

兵隊が乗船し終ると日向丸は寄港する門司港に向って航行を始めた。門司港に着くと我々は仮上陸を許された。

祖国よさらばと叫びつゝ……

上陸した我々は再び内地の土を踏むことは出来ないかも知れないと考えていた。

突然佐々木一等兵が「池田！ 今日で日本本土は見納めになるかも知れないぞ！ 思いっきり港の土を踏み、祖国よさらばと叫ぼうではないか！」と言った。私は彼に同調して、二人で「祖国よさらば！」と繰り返し叫びながら土を踏み固めるように何回も何回も踏みつけた。

日向丸は兵隊を乗せるだけでなく軍馬や兵器なども積載した。積荷が終わった後我々は船に戻った。

日向丸、門司港を出発、航海の旅に

門司港を出航した朝は曇天で海は荒れていた。何となく憂鬱な気分であった。

船の揺れは激しく船酔いをして青ざめた顔をしている兵隊もいた。又二月の初旬のこととて、外も船の中も寒かった。兵隊が船艙内にぎっしり詰め込まれていて肩を寄せ合って毛布を被っていたので寒さを何とか凌ぐことが出来た。

輸送船が門司港を出発して、かれこれ三、四時間経った頃に突然ドーンという衝撃音が聞こえて来た。あっ！ やられたか！ 米軍の魚雷に。皆一瞬そう思った。兵隊達の顔は青ざめた。すると甲板の方から将校が船艙に駆け降りて来て、大声で叫んだ。「魚雷では無いぞ！ 心配するな！」と。

事実は甲板に積んであったボート数隻が船の揺れによって海に投げ出された時の音で、ボートの中にいた兵隊数名もボートと一緒に海に投げ出された。この投げ出された兵隊は護衛艦に救助された。

日向丸、基隆港に到着

我々が満州を出発する前に、参謀本部は兵力配備に際して台湾への米軍の進行の可能性を考慮し、沖縄守備担当の第三十二軍の中の第九師団を台湾に転用した。この第九師団は我々第十二師団と共に在満当時牡丹江に駐屯して昭十九年六月満州を発ち沖縄に来た師団であり、北陸男児で固めた師団であり精強の名をほしいままにした師団であった。片方の我々第十二師団は九州健児の団結と負けじ魂に貫かれた師団であった。参謀本部はこの二軍団を台湾防衛の主要部隊としようとしたのか、或は第十二師団はフィリピン戦線を目指したもののバシー海峡航行危険と判断して急遽フィリピン戦線に向うことをやめて台湾に上陸させたのか、或は全然別の理由で台湾に上陸させたのか、その辺の事情は我々末端の兵卒の耳には届いて来なかった。

基隆に上陸、台南に駐屯

基隆に上陸した我々歩兵第四十八連隊は台南に駐屯することとなった。基隆に到着した時は二月だというのに内地の春を思わせるような暖かさであった。小雨が降っており、あたりの樹木は青々としていて雨にけぶるその風情は形容し難いほどの美しさであった。

台南の民間人は既に関東軍が来るということを噂で聞いていて、歓迎してくれた。連隊は各中隊毎に分散し、小学校や公共の施設を仮兵舎とし、間も無く陣地構築にかかった。連隊本部は台南女子師範学校の二階を仮の兵舎とし、事務を執ることから寝食全てをここで行った。

軍隊で一番大切なものは天皇陛下が自ら授けてくれた軍旗（連隊旗）である。敵機の爆撃に充分耐え得る堅固な防空壕に格護する必要がある。連隊が台南に到着して先ず創ったものはこの防空壕であった。

初年兵三名が上等兵となる

昭和二十年三月、初年兵九名中三名が上等兵に昇進した。幸運にも私もその中の一人となった。前記した通り私は幹部候補生試験を受けさせてもらえず悔しい思いをしたが、一年で上等兵になれるとは思っていなかったのが嬉しかった。

赤禪部隊あかぜんと民間人は笑う

釜山で日向丸に乗り込む際に、輸送船が魚雷を受けて兵隊が海に投げ出された時、これを腰につけていれば鱧ふかが襲ってこないと言って赤い帯のような布が兵隊に支給された。この赤い布を褌にして全裸で鶴嘴を振るっている兵隊を見て民間人は赤褌部隊あかふんと綽名をつけて笑っていた。

古参の曹長と若い少尉の争い

我々は毎日、朝と夕方事務所に近い橋の上で点呼を受けることになっていた。或る日の夕方、民家を宿舎にしている彼のR曹長が来て点呼をとることになっていた。我々は早めに橋の上に集まっていた。余談ではあるがR曹長は前記した通り釜山の街を見物させてくれた人で人情味があり、兵隊から慕われていた。そのR曹長が到着しない時間帯に幹部候補生から昇進した若いK少尉がやって来た。あたりを見廻して「R曹長がいないがどうしたんだ!」と呟いた。そして「ようし俺が点呼をとってやる!」と言ってK少尉が点呼をとった。暫らくしてR曹長がやって来た。K少尉はR曹長を酷く叱った。

すると、R曹長は、K少尉に向い、直立不動の姿勢をとり「遅れてきたものではありません。定められた時間よりも早く点呼をとったのは少尉殿の間違いであります。小官に代って点呼をとったのは何故でありますか?」と強い口調で言い放った。K少尉は黙って聞いていたが、後でぶつぶつ言っていた。若いK少尉が古参のR曹長に一本取られた場面であった。我々は心の中で拍手し、喝采を送っていた。K少尉はS商業学校出身の気の荒い少尉で日頃兵隊達に嫌われていた。

待ちに待った外出許可

規律の厳しい軍隊で無味乾燥な生活を送っている初年兵にも外出が許可され、皆歡樂街へと繰り出した。私もその仲間であったが、お寺詣りにも興味を持っていた。郊外に在る台南山妙経寺という寺に外出の度に参詣をした。余談ではあるがこの縁で終戦後進駐軍が現地で就職を許すということになり、軍のすすめる職は沖仲仕であった。私は妙経寺の住職に頼んで寺で働かせて貰うこととなり、就職決定第一号と仲間に冷やかされた。結局職に就かせるという進駐軍の決定はすぐ取り消しとなったが。

米軍機、台湾上空を飛んで沖縄へ

米軍機は台湾上空を通過して沖縄へと飛んで行った。沖縄よりも先に台湾に攻めて来る

と信じていたのに。

無謀な戦争は漸次わが軍が不利となり、軍隊の中には厭戦気分が漂い始め戦争の終結を望むようになって行った。然しわが連隊は明けても暮れても毎日毎日陣地構築を続けていた。

回虫症に罹る

私は回虫症に罹り七転八倒の苦しみを経験した。回虫を駆除する薬が連隊内に無く、軍医は「今手配をしているからそれまで我慢するように」と言って防空壕の中に藁を敷いてくれた。その藁の上に横たわって痛みを耐えていた。痛みを耐え兼ねて同僚の佐藤一等兵に「殺してくれ!」と叫んだことがある。彼は寝る間を惜しんで背中を擦ってくれた。間もなくどこから送られて来たのか連隊に届き、その薬を飲むと楽になりやがて回復した。

今度はマラリヤに罹る

私は回虫症が治って一ヶ月ほど経った頃に、今度はマラリヤに罹った。高熱の為大変苦しんだ。軍医は私を台南野戦病院に入院させることにした。満州で急性気管支炎を患った時診療所で世話をしてくれた顔馴染の衛生兵長がいて「池田上等兵! 又入院か?」と言って笑いながら温かく迎え入れてくれた。偶々私が嘗て当番兵を勤めたことのあるW准尉が胃炎を患って入院していた。上等な菓子を持って来て御馳走してくれた。私の病気が快方に向かい、ぼつぼつ退院できると思っていた時に日本が敗けたという噂が流れた。

病院長の終戦にあたっての兵への訓示

八月十五日の夕方、野戦病院長は入院患者を集め、次の様な訓示をした。

「この度日本は米英等の敵国と和睦を結ぶことになった。敗けた訳ではないから君達は心配しないで病氣療養に専念するように」と。兵隊達の心の動揺を鎮める為に右のような訓示をしたのである。すぐ敗戦と判ることを知りつつ。私は病院長の苦衷を察した。

間もなく私のマラリヤも治り、退院して平常の勤務に戻った。

農業に従事し、復員船を待つ

先ず仮兵舎である小学校を引き揚げて僻地に移り荒地を耕し野菜を作り、手持の玄米を食べて過すこととなった。我々の暮らす僻地には連隊本部の兵隊全員が住める木造の大き

な二階家があった。耕地の近くに砂糖黍畑がありこっそり黍を頂いてしゃぶった。その汁は甘くて美味で、玄米と汁だけで過ごしている我々には楽しみの一つであった。

我が軍の輸送船は多数敵に沈められ、船腹が不足しているのでなかなか我々を迎えに来てくれないだろうとなかばあきらめ、気長に待つ心境になっていた。全員が。

兵隊と民間人との交流と恋愛

昭和二十一年の二月上旬、復員船が迎えに来てくれることとなり、我々は百姓生活を切り上げて乗船地の高雄港に近い或る小学校に終結することとなった。乗船まで長い期間待機させられた。終戦後は軍律も緩み、民間人との交流も盛んで訪問先の娘と恋愛をし、帰国後結婚をすることを約束した兵隊も何人かいた。結婚を約束した娘と一緒に民間人が台南から高雄に見送りに来た。或る兵隊は先住民の娘と恋仲となり、現地除隊をさせてもらって、台湾で結婚生活を営みたいということを切に願っていた。現地除隊は例外なく認められなかったのでこの兵隊はこの恋を貫くことが出来なかった。生木を割かれるような辛い思いであきらめたであろうと私は同情した。

又連隊本部付の行李班の班長のH軍曹は太平洋戦争で夫をなくした未亡人と恋をし、現地除隊をして台湾で結婚生活をしたと思い連隊長に願い出た。ところが現地除隊は認められず、勝手に隊を離れて未亡人と同棲生活をしていたことを連隊長はとがめ、軍曹の階級を剥奪し、最下級の二等兵に降格してしまった。私はこのH軍曹の純愛に心を打たれた。

更に古参の兵長のYは未だ台南にいたとき台南の中心部に在る理髪店に入りびたっていた。この理髪店の夫人はY兵長と同じ小学校で学びお互いに顔見知りの間柄であった。夫人の方がY兵長よりも二歳上だとのことであった。夫人は色白の肉感的な背の高い美人であった。Y兵長が繁く理髪店に遊びに行っているうちにすっかり親しくなった。私も時々兵長のお供をして理髪店に行ったが、夫人とY兵長とは恋人同士のように見えた。兵長の語ったところによると兵長が夜帰営する時には必ず途中まで夫人が送って来て人目を避けて関係を迫ったとのことであった。間もなく帰国の為Y兵長は高雄に移動しこの関係は断たれた。

復員船高雄港に入港

二月下旬復員船が高雄港に入港した。兵隊達は乗組員に内地の状況をくどくどと聞いていた。乗組員は原子爆弾の落ちた広島や長崎の惨状や国民が食料難で闇米を買う為に駆

ずり廻っていることや餓死者が出るかも知れないというようなことを縷々話していた。

復員船は一路鹿児島港へ向って航行

高雄に残る灯台守や民間人達は手を振って我々を見送って呉れた。私は航行中、台湾に
来た御陰で命拾いをし、満州に残されたが為にソ連軍と戦い、死んでいった戦友のことを
偲んでいた。復員船はその日の夕方鹿児島港に到着し、その晩は港に近い小学校に泊まっ
た。台湾の暖かさに馴らされた身体には内地の二月の寒さは辛かった。

歩兵第四十八連隊の解散式

翌朝、食事が終ると「全員校庭に集合せよ！」の号令がR曹長よりかかった。全員が校
庭の演壇に向って整列した。間もなく猫背で、髭をはやした連隊長がのっそりのっそりと
歩いて来た。連隊の解散という重要な式なので連隊長の胸のうちを語ってくれるだろうと
思った。ところが開口一番「解散」とだけ言って演壇を降りた。あっけ無い解散式であっ
た。日清、日露の戦で赫々たる戦果を挙げ精鋭と謳われた歩兵第四十八連隊は敵に対っ
て一発の弾をもうつことなく矛を納め、無念な思いで解散した。解散式が終り復員兵の我々
は鹿児島駅から列車で帰郷の途についた。

参考資料

- 島田俊彦著、中央公論社発行『関東軍』
- 草地貞吾著、宮川書店発行『その日関東軍は』
- 田中正人文、中西立太画、並木書店発行『凶解日本陸軍歩兵』
- 榎本捨三著、秋田書店発行『陸海名将一〇〇選』
- 和田武司訳、徳間書店発行『中国の故事名言』